

Interview

絵本作家 ヨシタケシンスケの頭の中

ヨシタケシンスケ

(絵本作家、イラストレーター)

子どもだけではなく、大人をも魅了するヨシタケシンスケの絵本。
絵本市場の冷え込みが取りざたされるなか、彼は次々にヒット作を生み出す。
さまざまな年齢層の心をつかむ発想は、一体どこから生まれているのか。
ヨシタケシンスケの頭の中を覗く。



ヨシタケの絵本。手前は第6回MOE絵本屋さん大賞第1位受賞作の『りんごかもしれない』。

いつも手帳を持ち歩いていて、思いつくままに絵を描き留めています。ずっと続けていて、今では六五冊目になりました。

実は子どものころは絵が下手で、描くのも好きではありませんでした。自己表現をしたいという気持ちもなく、人が必要とするものをつくる職人になりたくて、美術系の学部がある大学に進み、そこで立体作品のデザイン画などを少し描いていました。

卒業して半年間だけ会社勤めをしたのですが、あまりのストレスから、イラストと愚痴の言葉をセツトで描くようになったんです。会社の机で企画書を書くふりをして落書きをしていました。それも、人の気配を感じたらすぐ描いている手で隠せるサイズの小ささで。もし愚痴を言葉だけで書いて、見られたとしたら、ちょっと問題ですよ。その下に小さい女の子の絵を添えると、これは僕じゃなくて女の子のセリフだよ、と言い訳できるんです。ストレス発散以外の何ものでもないのですが。

そういう経緯で小さく絵を描いていたので、いまだに小さい絵しか描けません。イラストと文章が一体化したスタイルもこのときに出来上がりました。

落書きがバレたのがすべての始まり

隠しながら落書きをしていた会社員時代、ある日うっかりして、経理の女性に見つかってしまいました。そして、「あ、かわいい」と言ってもらえたんです。

この人、絶対僕のことを好きなんだ、と思って(笑)。今後どうしよう!? というんなパターンを考えて、結局どうにもならなかったのですが。

そのとき、褒めてもらえたことが単純にうれしかった。人に見せて内容を理解してもらえんだ、かわいいとまで言ってもらえんだ、すごい! と思って、勢いでイラストをまとめた同人誌をつくりました。描き溜めていたものを深夜のコンビニでコピーして、紙にぺたぺた貼り、自費出版で。そのころ、学生時代の立体作品の個展みたいなものをぼちぼちやっていたので、会場で売ろうと思ったのですが、当然、そんなに売れるはずもなく。三〇〇冊刷ったのを、自分の部屋に置いておいてもしょうがないので、どんな人にもあげました。それがいろいろ人々の手に渡り、出版社からイラスト集にしないかという話をいただいて、それで三〇歳のときに『しかもフタが無い』(PARCO出版)というイラスト集を出しました。あまり売れなかったのですが、それを見た児童書出版社の編集者が、「この人に絵本を描かせてみたい」と、企画会議で提案してくださったんです。しかしボツにされ、また提案してはボツにされ……を繰り返して、八年目にようやく「そんなに言うなら」とゴースサインが出たそうで、そこで初めて連絡をもらいました。

初めての絵本『りんごかもしれない』(ブロンズ新社)を出版したのは、二〇一三年、四〇歳の時のことです。実はそれまで、自分が絵本作家になれる

とは思っていませんでした。というのも、過去に一度、他社から絵本の打診をいただいたことがありましたが、そのときはうまくできなかったのです。

もともと母が大の絵本好きで、家庭文庫のようなものを開いて子どもたちを集め、読み聞かせなどしていたので、僕も自然と絵本に囲まれて育ちました。好きでたくさん読んでいたからこそ、絵本というものに対するハードルが高くなっていたのです。すでに名作と言われる作品が多数あるなかで、自分に何ができるのか、と緊張してしまつて。スケッチは描いていたけれど、お話はつくれないし、絵は小さくしか描けないし、色をつけるのも下手。僕は絵本には向いていないのではないかと……。

しかしこのときは、取っかかりとなる企画を三つ、編集者が用意してくれました。その中に「りんごをいろんな目線で見てみる」という、『りんごかもしれない』のテーマそのもののずばりの企画があったんです。この時点ではりんごでなくてもよく、何か一つのモチーフをさまざまな角度から見ること、ものの見方の多様さを子どもにも面白がってもらうための絵本、という企画でした。これはすごく面白そうだな、と思いました。

振り返って考えると、お題を与えられたことで、それまで一〇年以上続けてきたイラストレーターの経験が生きたのだと思います。イラストを発注されるときは、記事の内容にぴったりな絵を描くといった役割と、サイズや比率などの制約があります。そ

れら全部を満たしたうえで、自分なりのプラスアルファを入れ込むというのが僕の仕事のやり方でした。「何でもいい」と言われるとかえって難しく考えてしまっていたのが、お題とページ数という枠を与えられたことで、普段の仕事と同じように取り組めたのです。

テーマが決まった当初は、もって教育的な内容で考えていました。例えばりんごを実と皮と種に分けてみようとか、いろいろな国の言葉で「りんご」と言ってみようとか。それがなかなか面白くならず、どうしようかと悩んでいたとき、では、りんごに見えるけれども、りんごじゃなかったとしたら？ と思いついたら、急に何でもありになったんです。嘘つき放題。これはいいぞ、と。

もしりんごそのものをありのままに描いて、それが間違っていたら怒られてしまいますが、「りんごかもしくない」というキーワードでくると、すべて嘘になって怒られる理由がなくなります。主人公の男の子の妄想なので、何を描いてもいい。僕は怒られるのが嫌いなので、どうすれば怒られずに済むかということを経回考えるんです(笑)。

絵本づくりは共同作業

その編集者にはとても多くのことを教えてもらいました。「絵本とは、どうあるべきか」という凝り固まった考えが崩され、絵本というのはすごく自由な

表現媒体で、やってはいけないことって実はそんなにないのだ、と解放されたのです。

僕にとって絵本づくりとは、編集者との共同作業です。お題をもらったのもそうだし、子どもに通じにくい言葉や表現があったら指摘が入る。児童書をつくるプロから意見をもらえるというのは、非常に安心感があって、思い切り飛び出せるんです。

自分一人だけで、絵本ってこういうものなんだろうと想像してつくと、どこかで見たことのあるようなものしかできなかったかもしれません。僕が出した自由な発想を、絵本でやってもいいぎりぎりのラインを知っている方に見てもらい、飛び出しすぎているところがないか、逆に絵本としてはありきたりな表現があったら、そこはもっと外に出してもいい、と指摘してもらおう。おかげで、自主規制で内側にこまることもなく、僕自身が面白いと思うものをそのままぶつけられました。

そうやって微調整をしていくことで、絵本で許されるぎりぎりのラインで表現が研ぎ澄まされていき、最終的に「今までになかった絵本」と言っていただけになるようになったのではないかと思います。やり取りを重ねてつくったものは、完成度が上がっていくのが自分でもよくわかります。そういう成功体験があれば、次も、何か引っかけた部分があったとしても、もったいい着地点が必ずあるはずだ、と頑張れるようになるんです。

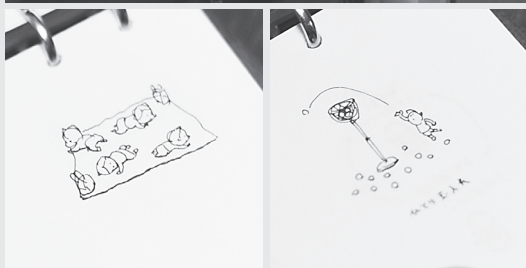
作家にはいろいろなタイプがいて、すべて自分で

たら、きつと救われた部分があったと思うのです。子ども時代に読んでいた絵本で、一番に思い出すのは『からすのパンやさん』(かこさとし・偕成社)。

初めて絵本をつくるとき、これが最初で最後だと思ったので、好きだった絵本の要素を全部入れよう、嫌いだった絵本の要素は絶対に入れたくない、と思いました。ではどんな絵本が好きだったのかと考えたとき、真っ先に浮かんだのが、『からすのパンやさん』のパンがいっぱい並んだ見開きだったんです。今日はどれを食べようかなと考えながら、お母さんはどれ？ と聞いたりして、本を媒介にしたコミュニケーションが盛り上がるんです。物語を読むというよりは、図鑑みたいな楽しみ方でした。ペー

ジを開いて、じーっとこっちを見たり、あっちを見たり。それも絵本の一つの楽しみ方なんですよね。『りんごかもしくない』の、物がずらりと並んでいるページは、まさにこれを意識しました。

もう一冊、『やっぱりおかみ』(佐々木マキ・福音館書店)という絵本も好きでした。小さいころはただ絵がかわいいという理由で、気に入ってよく読んでいたのですが、お話の意味は全然わかっていませんでした。大学生のころ、たまたま本屋さんで見かけて、ああ懐かしい、でもこれ意味がわからなかったんだよなと思いつつ、もう一回読んでみたら、なんと理解できたんです。あ、こういう話だったんだ、すごい！ と思いました。



(上) 自宅の作業場。(下) ヨシタケが心のリハビリとして、日常で思いついたものを描いている手帳。

決めて、そこから一言一句変えてはいけないという人もいます。僕はやっぱり、人との打ち合わせの中で、相手が一番求めているものは何なのか、どうすれば誰も怒らせることなく言いたいことが伝わるのかと、そういうことを考えてしまう。絵本は商品でもあるので、つくっても売れないと次につながるまいし、関わってくれた人みんなに迷惑がかかってしまいます。イラストレーターや広告美術の仕事にも長く携わっていたので、それぞれのプロがスキルを持ち寄り、プロジェクト全体が盛り上がりやすいという、いちスタッフのような感覚もあるのです。

子どものころの自分に 喜んでもらえるような絵本を

子どものころは、すごく人見知りで、甘えん坊。自分からは何もやらず、ずっと母親の後ろに隠れていました。だから、今でもそういう子に一番感情移入をしてしまうんです。絵本をつくるときは、昔の自分みたいな子に、一番喜んでほしいという気持ちがあります。

放っておいてもぐいぐい前に出てくるような子は、勝手に生きていくんです。そうではない子に「いやあ、前に出てこれないよね、僕も出ていけないかった。でも、そういう人間でも大人になれるよ。あまつさえ絵本作家になれるやつだっているんだよ」と伝えたい。自分が子どものころにそういう大人がい

年齢を重ねるごとに、子どものころにはわからなかったことを理解できるのも絵本の良さです。本自体は何も変わらなくても、読む側が成長することによって、全く別なものとして受け止めることができる。もし自分が絵本をつくるなら、そういう絵本にできたら最高だと思ったんです。なので、子どもたちに喜ばれるのはもちろん、「大人が読んでも面白い」と言ってもらえるのが一番うれしいのです。

反対に、嫌いだった絵本は、大人側のあざとさ、説教くさが透けて見えるものです。小さいころ、絵本の三ページ目くらいで、あ、これはつまらないやつだ、とわかってしまうことがありました。ページをめくるにつれてだんだん文字数が増えていって、上から目線になって、最後に感想文を書きましよう、みたいなもの。そういう本も必要だとは思いますが、僕自身は、なんだか怒られているような気持ちになつてしまうので、そのような内容は避けるようにしました。

子どもに絵本を楽しく読んでもらうためには、彼らに信用される語り口やアプローチが非常に大事なのだと思います。人見知りなひねくれ者だった僕みたいな子どもが、一〇〇人に二人くらいはいるとして、そういう子どもと「ねー」と一緒に共感し合えれば、それでいい。

子どもに対して大人がやるべきことの一つに、人生の選択肢を増やすというのがあっていいかと思えます。こういう考え方があって、こういう意見

ギロクのススめ

ヨシタケシンスケ

② 「自分を励ますおもしろネタ」の記録方法はいろいろあります。

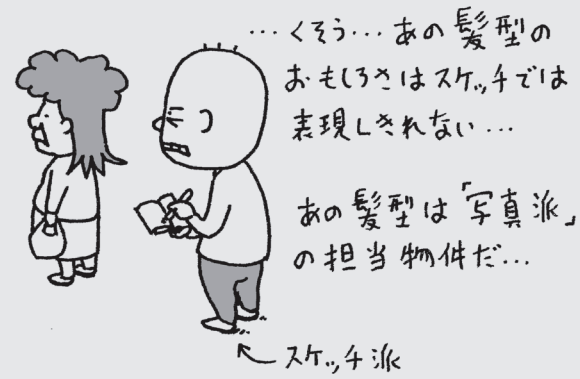


① 「ああ、こんな世界、なくなってしまうといいのに…」。

そんな時、自分をとり戻すために「自分がおもしろいと思ったこと」を記録しておくと、なにかとベリです。



③ おもしろいのは、記録方法によってそれぞれの得意分野がある、ということです。



④ なんにせよ、「おもしろさ」を記録しようすると、おのずと「いろんな種類のおもしろさ」が存在することに気が付く訳です。



いという提案はできたかな、という満足感はありません。

死の話はタブーとされることも多いですが、深刻に扱い遠ざけることで、何かいいことがあるだろうか、と言いたい気持ちもあるんです。大事すぎて話せない事柄と、日常のどうでもよすぎて話す価値もない事柄、両方にきちんと言葉をつけていきたい。大事と思っていることって本当に大事かね、くだらないと思ってることって本当にくだらないかねって。どちらも同じ熱量で扱っていききたいんです。

大事なことは人によって違うし、幸せの概念も、生きる目的も違う。その中で、自分だったらどれなんだろうと考えるきっかけになる作品をつくっていければ、一番いいですね。

絵を描くことは心のリハビリ

僕はもともとメンタルが弱いというか、ネガティブな考え方をする人間なので、放っておくとどんどん気持ちが落ち込んでしまふんです。例えば朝、暗いニュースを目にすると、それだけで一日が駄目になってしまふ。それでは社会人としてやっていけないので、どうにかして自分の気持ちを盛り上げ直さなきゃいけないんですよ。

そういうとき、通勤電車の中で、毎日同じ景色だけど、見ようによってはあの人のあの格好って面白くない？ とか、こういう展開になったら楽しいん

じゃない？ とか、世の中をなんとか死に物狂いで面白がろうとしたんです。手帳に絵を描きながら、

つらいことも多い世界だけれど、考え方次第、言い方次第でいくらかでも面白がれる、生きるに値するものなんだ、と自分に言い聞かせました。僕にとって、絵を描くことはやらざるを得ないもの、リハビリのようなものなんです。

その記録が、今では仕事のネタ帳になっているというのは、非常に稀で幸せな現象だと思います。よくアーティストで「表現活動をしていなかったら、自分は今ごろ刑務所にいるかもしれない」と言う人がいますが、その気持ちがよくわかります。

僕の場合、自分自身のコンプレックスや弱さに向き合うしかなくて、そういう気持ちは一〇〇人に二人ぐらいしか理解してくれないだろうと思って絵本をつくっていたら、案外多くの人に面白いと受け入れていただけただけなのです。みんな、根底の部分に弱さを抱えていて、それで共感してくれたようなんですね。

これは僕にとっては二重の驚きでした。みんな同じような思いを持っていたのかということ、でもみんな、そこを乗り越えて自分を強くして大人になっていったのに、僕はまだずっとそこにいるのかということ、そのとき初めて知ることができたのです。人間というのは、自分が思ってるほどみんな一緒じゃないけど、自分が思ってるほど違いもしない。その共通する部分としない部分の差が、面白い

もある……と、たくさん提示してあげること。現代には、限られた選択肢の中からしか生き方を選べない傾向があるような気がします。でも本当は、駄目な大人だっていっぱいいる、夢がかなわなくてもどうにかやっている人もいます。そういう成功例と失敗例をすべて見せて、その中で自分にしっくりくるものを選べばいいのだと言ってあげたい。その選択肢の一番端っこの、少数派の枠として僕が機能できればいい。僕が絵本を描く価値があるとすれば、そこにしかない、と思っています。

「死」というタブーに挑戦した絵本

いろいろな絵本をつくったなかで特に難しかったのは、死をテーマにした『このあとどうしちゃおう』（ブロンズ新社）でした。僕自身、両親を早くに亡くして、大切な人と大切な話ができなかったという後悔があるし、東日本大震災を経て、やっぱり遠ざけていられないテーマだという思いがあったんです。でも、僕は悲しい本が嫌いなので、読み終わったあとに悲しくならず、読んだ人同士で死について会話が出来るものを目指しました。

死というのは感情とがっちり結びついていて、人によってとらえ方も全く違うので、いかに不謹慎にならない範囲でふざけるかが、ハードルの高い作業でした。いろいろ試行錯誤した結果、言いたいことは言えたかな、こういう死のとらえ方があってもいい

だったりするわけです。

いつかは神様から取材費が下りる

スケッチが本になったことで、見た人からイラストの仕事をいただけるようになりました。その後、絵本の編集者からのオファーにもつながりました。

最初の絵本が出たとき、思いもかけず、たくさんの書店がいい場所に置いてくれました。これは普通あり得ないことで、驚いた出版社の営業さんが理由を訊いたところ、「一〇年前のイラスト集を持っていて、好きだったんです」と言ってくれる書店員さんが何人もいたそうなんです。あまり売れなかった本だったはずなのに、僕の知らない所で誰かが見ていて、ずっと覚えていてくれた。

そう思うと、つらかった会社員時代も、子どものころから不安だった気持ちも、全部元が取れているんです。何をやってもネタになるし、どんなにつらい思いをしても取材だと思えば耐えられる。いつか神様から取材費が下りる、そういうものなんだな、と思っています。

よしたけしんすけ 絵本作家、イラストレーター。一九七三年、神奈川県生まれ。絵本作家としてのデビュー作「りんごかもしれない」(ブロンズ新社)で第六回MOE絵本屋さん大賞第一位を受賞した。日常で見逃しがちな「コマ」を面白く描く作風が人気。主な作品に、『もうぬげない』『こねてのばして』共にブロンズ新社など。

構成・文 石飛千尋